

■ **すでにドル/円は130~135円を視野に入れ始めた!?**

前回更新分の本欄で「当面のドル/円・ロングについては相応の慎重さが求められる」と述べた。その基本的な心構えは中期的に必要なものであるが、足元でドル/円の上昇が止まらない状態となっていることも事実。米国景気がなおも強い基調を維持し、同時にインフレ傾向が一層強まっていることから、依然ドル買いの強い流れは継続している。

少し振り返ると、先週13日に発表された3月の米生産者物価指数は前年比11.2%上昇と、市場の事前予想を大きく上回り、その伸び率は統計で遡れる2010年以降で最大となった。加えて、14日に発表された4月のミシガン大学消費者信頼感指数も事前予想を大幅に上回り、15日に発表された4月のNY連銀製造業景況指数も事前予想の1.0に対して24.6と、急激な回復ぶりを明らかにする結果であった。新規受注は今年最高水準に達し、入荷遅延の指数も低下している。

今週18日には、セントルイス連銀のブラード総裁が「0.75ポイントの利上げの可能性も排除しない」と述べており、少なくとも5月の米連邦公開市場委員会(FOMC)を通過するまでは、米国債の下値に買いを入れることも難しい(利回りは下がりにくい)。その結果、米10年債利回りがいよいよ3%台乗せという事態になると、それは相応に市場が敏感な反応を示すこととなりそうである。

連日のように鈴木財務相が口先介入を繰り返しているが、その「注視する」というコメントは、かえって買い安心感につながっているとの指摘もある。

また、今朝方発表された3月の貿易収支(日本通関ベース)において赤字額が予想を大きく上回る結果(4124億円の赤字/予想は715億円の赤字)となったことも、一段の円安進行を促す要素の一つと言える。

前回更新分でも述べた通り、かくなるうへは日銀が政策方針を見直す可能性を段階的にもほのめかしつつ、4月分から一気に跳ね上がることが確実視される国内の消費者物価指数(CPI)の結果を待つよりないようにも思われる。

どのみち、それまでの間にドル/円が130円処を試しに行く可能性は足元で着実に高まっている。既知のとおり、チャート上の次の節目は2022年2月に付けた135円15円ということになり、いずれ同水準が視野に入ってくる、いや既に視野に入っていると考えておく必要もありそうだ。

昨日(19日)、国際通貨基金(IMF)が2022年の世界経済見通しを大幅に下方修正したことも見逃せない。

ことに、ユーロ圏の成長率が前回予想の3.9%から2.8%にまで引き下げられたことのインパクトは大きかった。予想されていたことではあるが、次回以降の改定でも一段と引き下げられる可能性があるとの印象が残った。

一方で、米国の成長率は前回予想の4%から3.7%に引き下げられた。これも大方予想されていたことではあるが、ユーロ圏との“温度差”がより強く印象付けられる結果であったことは間違いない。むしろ、これはユーロ/ドルの上値を押さえつける要素の一つと捉えられ、やはり一旦は2020年3月安値=1.0635ドルを試しに行く可能性が高いと見られる。目先は、1.0800ドル処をクリアに上抜ける動きにならない限り、あらためて1.0750ドル処を試しに行くと考えておきたい。

(04月20日 09:00)